シリーズ

東久留米の学校史

その１

今の市立第一小学校の前身に当たる成蹊（せいけい）学校が前沢の地に新築開校したのが明治17年12月で、昨年ちょうど130周年（１８８４年）を迎えました。今年は、翌年の明治18年10月に南沢に新築開校した共立学校（第三小の前身）ができてから130年となります。

江戸時代から独自の教育制度を生み出した日本は、明治維新とその後の近代化の中で大きな変貌を遂げ、東久留米の学校もその時代の中でさまざまな変化をみせてきました。これまで明治から昭和前期までの学校の変遷に関しては不明な点が多くあり、郷土資料室では『東久留米の近代史』（24年市教育委員会刊）を出版するに当たり、再調査を行ってきました。その成果も生かし、今回から東久留米の学校の変遷をシリーズで振り返ります（**本文は市文化財保護審議会委員で『東久留米の近代史』の編著者でもある山崎丈氏による**）。

詳しくは生涯学習課文化財係☎472・0051へ。

1　江戸から明治へ

〈筆子塚〉

江戸時代の日本の識字率は世界的にみても極めて高く、50%を超えていたともいわれています。その中で、特に庶民の教育を担っていたのが寺子屋（てらこや）です。寺子屋という名称は主に上方（近畿地方）で使われていたもので、江戸では手習所（てならいじょ）や手跡指南（しゅせきしなん）と呼ばれていました。これらの寺子屋や手習所では、いわゆる「読み・書き・そろばん」や地理、書簡作法から道徳の教育も行われ、村の役人や僧侶・神職・篤志家などが師匠（先生）として教えていました。江戸時代後期から幕末にかけて急激に増加し、農漁村へも普及したことから、全国で1万6000カ所ほどあったといわれています（数万カ所という説もあります）。

この手習所の足跡を訪ねる手がかりとなるのが、筆子塚（ふでこづか）や筆子の墓と呼ばれるものです。筆子塚は師匠から学んだ弟子（筆子）たちが、師の生前の恩に報いるために建てた石製の墓碑のことで、東久留米市域を構成する10の旧村・新田で7基確認されています。そのうち最も古いのが、柳窪村の野崎家墓所内にある安永4年（1775年）のものです（市指定史跡・写真参照）。正面に「浄心法師霊位」、側面に「手習門弟中」と刻まれていることから、手習の弟子たちが師であった僧を偲んで建立したものと考えられます。そのほか、文政4年（1821年）から明治3年（1870年）にかけて門前村・柳窪村・柳窪新田・下里村に造られた5基の筆子塚が存在します。正面には師の僧名や戒名があり、側面には筆子中と刻まれています。台座には筆子の名が刻まれたものもあり、その数は多いもので周辺10村以上の90余名にものぼります。

⬆筆子塚（安永４年、柳窪五丁目墓所内、市内最古の筆子塚・市指定史跡）

市内で一番最後の明治26年（1893年）の筆子塚が前沢村の米津寺内にあります。米津寺第12世住職であった清源和尚が師で、台座中央に大きく筆子中とあり、その側面には前沢村を中心とする80余名の筆子の氏名が刻まれています。その中には成蹊学校の初代校長となった下里村の島崎保平氏の名も見られます。

〈学舎の設立〉

明治維新により、近代国家の道を歩み始めた日本は教育制度の確立に力を入れました。明治5年（1872年）に公布された初めての近代教育制度である「学制」は、「邑（むら）に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す」と、国民が平等に教育を受けることができることをうたっています。全国を大学区・中学区・小学区に分け、各学区に大学校・中学校・小学校を設置するというものですが、時代は混乱期であり、中央集権的な実施方法や過重な地方の経費負担により学校の設置は思うように進まなかったのが実情です。

当時の東久留米市域の村々は、学制による第一大学区・第八中学区に属しました。また、明治7年に行政的な制度として大区小区制が本格実施され、市域の南沢村・柳窪新田が神奈川県一一大区五小区、前沢村・柳窪村・下里村・門前村・神山村・落合村・小山村が同六小区にまとめられました。このような中、明治7年（1874年）に初めて誕生した公立教育機関が学舎です（**表1参照**）。六小区の前沢村に前南学舎、下里村に進明学舎、柳窪村に福徳学舎で、この三つを合わせて「三併学舎（さんぺいがくしゃ）」とも呼ばれ、名前は村ごとですが、一つの学舎として機能した可能性もあります。また、小山村・落合村・門前村・神山村の4カ村で設置したのが黒湧（くろわく）学舎です。さらに五小区の南沢村・柳窪新田では同じ五小区の田無村密蔵院にあった眞誠（しんせい）学舎の分校が南沢村に設置されたようです（『田無市教育百年史』）。

「学制」の公布によって形式的には村の私塾や寺小屋は廃止されましたが、これらの学舎は、当時の社会状況からみて、村または数村ごとに学舎名を付したもので、多くは幕末時の手習所などを踏襲したものであると考えられます。当時作成された『日本帝国文部省年報』（国立国会図書館所蔵）には設立年と教員や生徒数などが記載され、旧村にも学舎や学校についての古文書が残されていますが、詳細は今後の研究課題です。

ただし、これらの資料から分かってきたこともあります。例えば、前沢村の前南学舎は米津寺内にあった可能性が高いことです。米津寺にはかつて前南学舎の公印が存在したと伝えられ、前述の米津寺内にある明治26年の筆子塚の存在から、手習所がそのまま前南学舎として機能したことが考えられます。また、黒湧学舎は小山村にあったことが村文書により明らかで、黒目川の豊かな湧水に因んだ名だと思われます。伝承によれば屋号「さかや」の小山家の酒倉を屋号「けいこじょ」の小山平左衛門（当時）家南の黒目川沿いに移して使用したといわれています（現小山2の6付近）。小山平左衛門氏は明治6年に学区取締より小学教員辞令を受けています（小山村『御用留』）。さらに、眞誠学舎分校はその後の共立学校設立の動向からみて南沢の多聞寺内にあったという説もあります。

これらの学舎も翌年には学校へと名称変更しながら成蹊・共立学校の設立へと目まぐるしく動いていきますが、時代の混乱期をそれぞれの村が知恵を出し合って乗り越えていこうとする努力が、学校の変遷を通しても見えてくるのです（続く）。

＜表１　明治初期の公立学校の変遷＞

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">明治７年</th><th>明治８年</th><th>明治９年</th></tr>
<tr><td>村/制度等</td><td colspan="2">明治５年学制
明治７年大区小区制</td><td colspan="2">明治８年名称変更通達（６月）</td></tr>
<tr><td>前沢村</td><td rowspan="3">三併学舎</td><td>前南学舎</td><td>前沢学校</td><td>柳窪前沢学校</td></tr>
<tr><td>下里村</td><td>進明学舎</td><td>下里学校</td><td>下里学校</td></tr>
<tr><td>柳窪村</td><td>福徳学舎</td><td>柳久保学校</td><td>柳窪前沢学校</td></tr>
<tr><td>小山村</td><td colspan="2" rowspan="4">黒湧学舎</td><td rowspan="4">小山学校</td><td rowspan="2">小山学校</td></tr>
<tr><td>落合村</td></tr>
<tr><td>門前村</td><td>門前学校</td></tr>
<tr><td>神山村</td><td>小山学校</td></tr>
<tr><td>南沢村</td><td colspan="2" rowspan="2">眞誠学舎分校</td><td colspan="2" rowspan="2">田無学校分校</td></tr>
<tr><td>柳窪新田</td></tr>
</table>

◀われら市民大学

地域の教育力が大きく見直されています。今号では市の委託事業として、多くの市民が自主的に学んでいる「市民大学」について、2回にわたり、同運営委員会会長・佐藤柳次郎氏に紹介していただきます。第1回は市民大学の由来、歴史についてです。

詳しくは生涯学習課生涯学習係☎470・7781へ。

◆　◆

今から遡（さかのぼ）ること20年前、就任2期目の稲葉三千男市長（元東京大学教授・同新聞研究所長）から声がかかる。就任時から望んでいたことの一つに、このまちに市民が集い、市民が生涯にわたって学習できる学び舎＝市民大学（市長命名）をつくりたいと熱っぽく説かれた。大学の構想に向け協力してほしい旨申出を受ける。これに賛同し、早速、設立準備委員会の立ち上げに奔走する。一方、市長側も設置に関する「条例」の整備を急ぐ。6カ月後の平成8年12月には5人の有識者から成る委員会がスタートする。初日、会議は冒頭から大荒れで始まる。市側の出席者、能力の問題、予算、市民の関心度など。現実と理想のギャップにメンバーから厳しい言葉が飛び交う。何事も「事始め」はこうして動き出すものなのかもしれない。2年間、メンバーは熱く議論を重ね、大学設置の要綱をまとめる。

「建学の理念」…学びを通して個々の再発見と自立。他人（ひと）から学び自分を磨く（平成25年度制定）。**「制度の整備」**…当面、短期、中期コースを開講。将来は長期コースを開講。**「運営委員会のあり方と取扱い」**…運営委員会を早期に設置する。企画・運営は極力市民の手で自主的に行う。メンバー構成の選任は原則会長が担う。市側は行政主導にならないよう、可能な限りバックアップ体制を整えるなど、互いの立場を尊重した企画・運営に努める。今日にあって、私たち運営委員会メンバーはこの要綱を基本的に尊重し、堅持して、企画・運営に努めている。

さて、設立準備委員会は設置要綱を作成後、解散する。私はそのまま残り、運営委員会の設置作業に入る。メンバー編成10人は旧公民館のリーダー養成の修了者や地域活動のリーダー格の方に参加してもらう。初顔の皆さんは開口一番、「知恵を絞ってやっていくしかない」「先ずやれることから実践していこう」を合言葉に、手探りで初仕事が始まる。メンバーの努力と熱意が実を結び、平成12年8月に、中期コースの開講にこぎつける。

時に、市長提言から4年が過ぎていた（続く）。

《市民大学のカリキュラム》

平成12年度から15年度までは「わがまち東久留米をもっと知ろうパートⅠ～農あるまちづくり」「同パートⅡ～災害に強いまちづくり」「同パートⅢ～世代を超えてともに生きる」「同パートⅣ～地域をつくる学びあいから次世代への継承」。16年度は「みんなで支えよう福祉のまちづくり～学びから実践へ」。17年度と18年度には「地域の自立が地球を変えるパートⅠ～東久留米をとりまく環境を考えよう」「同パートⅡ～地球が、私たちが生き残るためには」。19年度は「みんなで支える地域の福祉～現状と今後」。20年度と21年度は「私たちの暮らしの中の『食と農』」「私たちの命を支える『食と農』」。22年度は「東久留米をもっと知ろう～水と緑の共生」。23年度は「同パートⅡ～私たちの暮らしと活力あるまちづくり」。24年度は「安心して暮らせる楽しいまち～何が求められるか」。25年度と26年度には「明日の東久留米を見つめて暮らしと文化を高めるためにパートⅠ～自分を磨こう」「同パートⅡ～自分を磨こう」。27年度には**「夢と希望のもてる東久留米をめざして－今学びを生かして一歩を踏み出そう」**をテーマに設定しています。

〈公開講座のお知らせ〉

11月4日（水）午前10時から、市民プラザで開催します。直原教育長を講師に迎え、市のいじめ防止対策について、地域の大人はどのようにかかわれるかを話してもらいます。事前申込不要。

子どもの読書と図書館

詳しくは図書館☎475・4646へ。

☆中央図書館が文部科学大臣表彰を受賞

中央図書館は「**平成27年度子ども読書活動優秀実践図書館**」として、4月23日（子ども読書の日）に、文部科学大臣から表彰されました。

昭和54年（1979年）8月の開館以来、おはなし会、絵本展、ブックスタート、多言語によるストーリーフェスタなどをボランティアの皆さんと進めてきたことは、本市の児童サービスの特徴です。また、科学絵本の読み聞かせと実験や観察の会「よもう！あそぼう！かがくの本」の開催や、科学技術振興機構の助成によりボランティア育成のための講座を開催し入門テキストを発行するなど、先駆的な活動を行っています。このような長年にわたる多彩な児童サービスが評価されました。

★新しい子ども読書活動推進事業がスタート

今年度は、平成26年度に策定された「第二次東久留米子ども読書活動推進計画」による、新しい子ども読書活動に関する事業が始まります。

低学年児童の図書館利用と読書習慣の定着を目標に、市立の小学校2～3年生の図書館訪問を推奨します。

就学前の幼児には、図書館員がお勧め絵本を持って訪問し読み聞かせなどを行う「**保育園・幼稚園訪問**」を、子育て世代のお父さんには絵本を介して子どもと触れ合ってもらうため、児童館行事に図書館員が絵本を持って一緒に参加し、「パパ読」を行いました。

そのほか、図書館資料を使った調べ学習の発表展示を学校と連携して実施します。地域全体での子ども読書の推進の一助として、学校、ボランティア、保護者の読書活動の要となるよう働きかけていきます。